

Wir schaffen das

表題のドイツ語はドイツの前首相アンゲラ・メルケルの回顧録「自由」（（上・下），角川書店，2025）の全編にわたって何度か出てくる本書での大事な言葉（キーワード）のひとつですが，“わたくしたちならできる”という意味のようです。メルケルは表題のメッセージを 2015 年に難民救済施策に関する記者会見で発言したのですが，直後はこの言葉に対しては賛否両論あったようです。ただ，最終的には，メルケルに対する信頼を高めるメッセージとして後世に残ることとなりました。

同じような言葉はどこかで聞いたことがあると思って記憶をたどっていきますと，Yes, We Can. Yes, We Did. （バルク・オバマ，November 4, 2008, 米国大統領就任演説）に行きつきました。前向きの言葉として共通しているようでなにか安心感を与えてくれます。御承知のようにメルケルは 2005 年から 2021 年まで，実に 16 年間ドイツの首相を務めたことからわかりますように，ドイツだけでなく世界の多くの人々に敬愛されてきました。

「回顧録」にあるその政治手法は，一言で表すのは大変むづかしいですが，“調整のメルケル”と評されるように，知力，胆力と独自の感性を持っていたからこそ，EU をけん引してこられたのだと推測します。一部で“メルケルのいない EU は，エッフェル塔のないパリのようだ”と評されるゆえんです。

回顧録にあるわけではありませんが，メルケルの信念を含めた人柄を偲ばせるエピソードがあります。

『カラーフィルムを忘れたのね』（独：Du hast den Farbfilm vergessen）は，旧・東ドイツの世界的パンク歌手であるニーナ・ハーゲンが 1974 年にリリースしたのですが，2021 年の首相退任式の折に，メルケルはこの曲を流したそうです。記者会見で選んだ理由を問われると「この曲は青春時代のハイライトだった」と答えたとのこと。そういえば，彼女は青春時代にベルリンの壁の崩壊を経験して，東ドイツから西ドイツへ移ってくるときに，この反体制歌（社会主義は灰色であるとの意味を暗に含む）に勇気をもらったとことを NHK の「映像の世紀：バタフライエフェクト」（2022 年 4 月 18 日放映，語りは，山根元世アナウンサー，音楽は，言わずと知れた，加古隆）でも見て知ったのを思い出しました。

メルケルの回顧録「自由」からは，いろいろなことを学ぶことができます。なかでも，自由と民主主義の大切さです。今まさにそのことが問われていることを考えますと，ことの重要性がしみじみ実感されます。そして，ドイツを守り，EU を守り，世界をまもる。それを継続いくためには，リーダーとしての為政者の勇氣，決断そして忍耐が不可欠であることも思い知らされます。こんな勇氣ある傑出した女性政治家を他に知りません。ただ，回顧録「自由」を読み進めている間中，もう一人の女性政治家のことが頭から離れませんでした。それは，1981 年から 1996 年に三度にわたってのノルウェーの首相を務めたグロ・ハーレム・ブルントラントです。彼女もノルウェーで国民から尊敬を集めた一人でした。私事ですが，筆者が首都・オスロに 1 年間滞在（1984 年～1985 年）したときにそれを実感しました。1984 年から 1987 年まで，国際連合に設置された「環境と開発に関する世界委員会（英語版）」(World Commission on

Environment and Development; WCED) は、彼女が委員長を務めたことからブルントラント委員会と呼ばれることは良く知られていることです。この委員会がまとめた報告書「Our Common Future」(通称「ブルントラント報告書」) には、「将来世代のニーズを損なうことなく現在の世代のニーズを満たすこと」という「持続可能な開発」の概念が打ち出され、SDGs の構築に繋がりました。



写真 1 アンゲラ・メルケル



写真 2 グロ・ハーレム・ブルントラント

(ともに <https://ja.wikipedia.org/wiki/>による)

翻って、日本において女性に限らず、長きにわたって尊敬や敬愛をもって迎えられた首相がいたろうかと生きてきた 80 年を振り返ってみますと寂しい気持ちになってしまいます。昨今の状況を眺めてみると、さらにさみしくなります。困難な時代こそ、日本は世界にどう貢献出来るのだろうか、そのためには、どんな国づくりが必要なのだろうか？ そう考えて国のリーダーを目指そうとする人はいないのだろうか？ “選挙で票を得るために政党を変えなければならない”ことが前提ではなく、“国を変革することを前提に政党を変える”のではないか？ という疑問がふつふつとわいてくるのは筆者一人でしょうか？

第二次世界大戦の敗戦後、日本は、新たな憲法の前文に＜国際社会において、名誉ある地位を占めたい＞という誓いを立てたと新聞の記事で知りました（読売新聞「編集手帳」、令和 7 年 8 月 29 日朝刊）。そういう想いを抱いてリーダーを目指す人はこの国では現れないのでしょうか？

「金曜日 朝一番に思うのは 今日是一日 短歌三昧」

(俵 万智氏の宿題 (NHK あさイチ) に応えて)

「金曜日 朝の光に 包まれて 短歌の海へ 心ゆだねる」

(生成 AI の助言による修正)

(令和 7 年 10 月 1 日、代表理事 安原一哉)